

若手邦楽聴き比べ



【開催日】平成30年8月24日（金）

【会場】東京都美術館 講堂

【主催】邦楽実演家団体連絡会議

【助成】アーツカウンシル東京

（公益財団法人東京都歴史文化財団）



長唄

「都風流」

唄

芳村辰三郎
杵屋勝四寿
杵屋巳津二朗

三味線

芳村伊十治郎
杵屋正叡
杵屋勝幸一

昭和二十二年(一九四七)、長唄研精会第四〇〇回記念演奏会で発表。久保田万太郎作詞、四世吉住小三郎・二世稀音家浄観作曲。これまで数多くの演奏会、舞踊公演で演奏されてきた近代長唄の代表曲です。

江戸浅草周辺の風物(虫売り)や年中行事(草市、べつたら市、酉の市)を通じ、初夏から冬へと季節の移り行く様子を表現しています。

三味線の聴きどころとしては、軽やかな前弾にはじまり、虫の合方や新内流しの合方、終盤には酉の市の合方、雪の合方と多彩な音色の変化が実に巧みな名曲です。

詞章

三下りへこれよりして お馬返しや羽織不二 ふじとしいえばつ
くばねの 川上さしてゆく舟や 芦間がくれにおもしろき 白帆
のかげの夏めきは へせんなり市の昼の雨 草市照らす宵の月
柳のかげに虫うりの 市松障子露くらき つゆの声ごえききわけ
て 鉦をたたくはかねたたき 更けては秋にかよう風 本調子へ菊
供養 菊の香もこそ仲見世の 人波わけてうちつるる わけて一
人はとしかさの 目につくあだなさし櫛も はや時雨月時雨ふる
べつたら市の賑わいも 昨日に過ぎておし照るや 酉の日近き星
のかげ へ引けはこのつ何故それを 四つというたか吉原は
拍子木までが嘘をつく さのえ ニよりへおはぐるどぶに写る灯
も 明けてあとなき霜晴れの 熊手にかかる落葉さえ 極月今日
ぞ年の市 へ境内埋めし へ雪のかさ

琵琶

「鴨越」

琵琶 荒井靖水

平家物語などで語られる一ノ谷の合戦のハイライト部分です。

一ノ谷に城郭を構えた平家を討とうと、義経は一ノ谷の背後鴨越(ひよどりごえ)に到着。平家方は背後に山を控え全く警戒していませんでした。義経は無人の馬を試しに追い落とし、三頭が無事に駆け下りたことを確認すると、自ら先陣となつて崖を下りますが、苔むした大岩石が垂直に十四、五丈も切り立ち、軍勢の道を阻みました。

その時、佐原十郎義連が「我等先陣仕る」と言うなり真つ先に駆け下りたので、三千余騎もみな続き、人馬もろとも怒涛の勢いで平地に降り立つと、奇襲に驚いた平家方は大混乱となり、平家方の兵たちは海に逃げ出すが、多くが船に乗れずに海で溺れ、味方に切られる者もあり、平家は総崩れとなつて四国の屋島へ落ちのびました。

詞章

さても源義経は 鴨越に駒を立て 撃つて入らんと焦れども いぶ
せき谷の峻しきに 如何はせんと軍兵が 手綱ひかえて有りけるを
鹿の通へるこの谷を 何条馬の渡らざる いざ試しみると言うまに
馬を無残に追い落とす これを見定め義経は 自ら馬に打ちまた
がり 若殿輩はこの我に 習いて続けと下知をなし 真坂様に乗
り下す 三千余騎も手綱をしめ 大將軍に後れじと 颯と落とせ
ば滝津瀬の 岩に砕くる風情にて 四五丁ばかり下りけり 之よ
り尚も十余剌 岩石そば立ち苔むして 進まん術もあらざれば
軍兵どもが茫然と 途方に暮れて有し時 佐原の義連立ち進み
吾等先陣仕らんと 真つ先かけて落としかる 義連撃たすな続け
やと 呼ばわりあえず義経も 落とせばいづれも劣らじと 続きし
谷は一の谷 いと峻しくて後陣の 鐙の鼻は前陣の 兜に触るるば

かりなり 軍兵共も心の中 八幡菩薩の御加護を 祈請なしつつ
打ち続き 落とすや否や三千余騎 どつと喚いて打つて入る 後に
峻しき鶴の 山をひかえし平家の方思いもよらぬ義経の 奇襲の攻
めに狼狽し 上を下へとふためくを 得たりと付け入る源氏の兵
蜘蛛手十文字に斬りまわす 弁慶 君の命を受け 飯屋飯屋に
火を放つ 煙に咽び火に悩み 争い乗れるその船の 沈むもあれば
出で船に 継りて助けを乞うもあり 無残と云うも愚かなり
斯くして大方撃ちなされ 遁れし兵はやうやうに 屋島にこそは
落ちにけれ

義太夫

「日高川入相花王」

渡し場の段」

浄瑠璃 竹本京之助
竹本寿々女
三味線 鶴澤賀寿
鶴澤弥々

宝暦九年(一七五九)大坂竹本座初演。竹田小出雲、近松半二、北窓俊一、
竹本三郎兵衛、二歩堂の合作。

物語は、平将門が都を平定した直後の時代。時の帝、朱雀天皇は病弱だ
つたため、弟の桜木親王に帝位を譲ろうとしていたが、反対派から追わ
れることとなった親王は、安珍と称して山伏の姿で、紀州の真那古庄司(ま
なこしようじ)という人物のもとを訪ねます。

庄司の娘清姫は、かつて都で親王を見初め、恋心を抱いていました。
しかし親王には、おだ巻姫という恋人がいたため、紀州で落ち合い、
追っ手から逃れるため道成寺へと向かいます。それを知った清姫は、嫉
妬のあまり逆上して二人の後を追います。日高川にたどり着き、渡し守
に舟を出すように頼みますが、渡し守が拒むと、その姿は蛇体に変化し、
川を渡っていくのでした。おなじみの安珍・清姫の物語です。

詞章

女心の一筋に脛もあらはにやうくと、日高の川をここかしこ

「ハア、嬉や、ここは日高の渡し場」

「なうその舟 早う渡してたべ、渡し守どの、いなく、コレなう

と呼ぶ声も枯野の秋の舟ならで、渡りかねるぞ甲斐もなき。寝耳に
ふつと舟長は苦押ししけて仏頂面

「エ、何ぢや、暄しいわい。夜夜中がや」と、『早う』のその声で、
あつたら夢を取逃がしたわい。夜が明けたら渡してやらう、エ、コレマ
アよう寝ている者を、アタ鈍くさい」
とつかうどに顔をしかめてつぶやけば

「なう自らは道成寺へ急ぐ者、早うこを渡してたべ、早う」
「エ何ぢや、鱈汁が食ひたい、アハミ、テモ嫌らしい奴やなあ、ハア聞
えた、コリヤ何ぢやな、宵に渡した山伏殿の後追うてきた女子ぢやな
エ、それなればなほ渡されぬ、ならぬ」
とにべもなき、詞に姫は涙声

「エ、そりや胴欲ぢや」わいなう、親の許したわが夫を他所の
女子に寝取られて、何とこの儘帰られう、不憫と思つて渡してたべ、
慈悲ぢや情ぢや、聞き分けて」
と頼みつかこちつ手を合わせ、嘆き沈むぞ哀れなり。こなたはなほも
空吹く風、

「ム、それほどに頼むなら渡してやらう、と言つたらよからうが、マア
いやぢや。おりやあの山伏に縁もなく、また由縁もなければ、渡されぬ
といふその訳を耳をさらへてよう聞けよ、かの山伏の頼みには、こうこ
うした女子が来たら必ず渡してくるな」と小金もろうて頼まれた
寒気をしのぐ山吹の八重か一重か板一枚、下は地獄のこの商売、頼
まれたれば男づく、いかは渡さぬ、マアならぬ、われもまたどれほどに
焦がれても及ばぬ恋ぢや、役にも立たぬ顎きかずと、足元の明るい内
にとつと去ね、エ、うぢ、とうぢつて棹の馳走を食らふか」
と慈悲も情けもなか、に渡す気色もなかりける。姫はあるにもあ
らればこそ

「エ、聞こえませぬ、安珍さま、恨みはうちにあるものを、かへつてこ
の身に恥かかされ、何と承らへられうぞいなう、女は一度わが夫と
思ひこんだらいかなこと、例へ地獄へ落つるとも可愛いという輪廻は離
れず、まして五月の宮詣でにふつと見染めしその日より、愛し床しい
恋しいと夢現にも忘れかね、焦れ焦る、恋人に逢ふて嬉しい言の葉を
語らふ間さへ情なや、恋の呵責に碎かれて身は煩惱に繋がる、紅蓮
の氷、大焦熱阿鼻修羅地獄へ落るとも、思ひ切られぬ安珍さま、聞
えぬわいな」

と身をもだへ『わつ』とばかりに声を上げ、嘆く涙の雨車軸、その名も高き紀の国や、日高の川に水増して堤も穿つごとくなり、泣く目を払ひすつくと立ち

「工、妬ましや腹立ちや、思ふ男を寝取られし恨みは誰に報ふべき、例へこの身は川水の底の藻屑となるとも、憎しと思ふ一念のやはか晴さで置くべきか」

と心を定め身繕ひ、川辺に立ちより水の面写す姿は大蛇の有様、舟長見るよりわなき声

「鬼になった、蛇になった、角が生えた、毛が生えた、食殺されては叶はじ」

と跡をも見ずして一散に、飛ぶが如くに逃げてゆく。

「さては悟気嫉妬の執着心、邪心、執念いやまさり、われは蛇体となりしよな、もはや添はれぬこの身の上、無間奈落へ沈まば沈め、恨みを言ふて言い破り、取殺さいでおかうか」

と怒りの昵、歯を噛み鳴らし、あたりを睨んで火焰を吹き岸の蛇籠もどうく〜と青みきつたる水の面、ざんぶとこそは飛入つたり。不思議や立浪逆巻きて、憤怒の大頭角振立て、髪も逆立つ浪がしら、抜手をきつて渡りしは怪しかりける。

三曲 「千鳥の曲」

箏 水飼希秋
胡弓 長塚梨秋

吉沢検校作曲の古雅でシンプルでありながら華やかさを持つ幕末の曲です。この曲は吉沢検校が自ら考案した「古今調子」を使っているため、新組歌「古今組」の一曲とされています。歌詞は千鳥を詠んだ和歌をそれぞれ一首づつ、前歌は古今和歌集から一首、後歌は金葉和歌集から一首を引用しています。後歌で引用している源兼昌の和歌は小倉百人一首にも入っていることで有名です。

詞章

(前歌) 塩の山 差出の磯に住む千鳥 君が御代をば
八千代とぞ鳴く
(後歌) 淡路島 通う千鳥の鳴く声に 幾世寢覚めぬ
須磨の関守 幾世寢覚めぬ 須磨の関守

「八千代獅子」

箏 水飼希秋
三絃 長塚梨秋
尺八 川瀬庸輔

この曲は、元々は尺八の曲を胡弓に移し、さらに三弦に移した後に箏の手がつけられたもので、現在では三曲合奏の最もポピュラーな曲の一つになっています。大変おめでたい歌詞で、明るい曲調なのでご祝儀物として演奏されます。前歌、手事、後歌という形式の典型的な箏曲で、お箏の調弦は、主に生田流では平調子、山田流では雲井調子、三絃(三味線)は本調子で演奏します。

詞章

(前歌) いつまでも かわらぬ御代に 合竹の
代々は幾千代 八千代ふる
(後歌) 雪ぞかかれる 松のふた葉に
雪ぞかかれる 松のふた葉に

邦楽実演家団体連絡会議

一般社団法人 義太夫協会	清元協会	一般財団法人 古曲会	新内協会	特定非営利活動法人 筑前琵琶連合会	常磐津協会	一般社団法人 長唄協会	公益社団法人 日本小唄連盟	公益社団法人 日本三曲協会	日本琵琶協会	一般社団法人 大阪三曲協会	一般社団法人 関西常磐津協会	公益社団法人 当道音楽会	名古屋邦楽協会
--------------	------	------------	------	-------------------	-------	-------------	---------------	---------------	--------	---------------	----------------	--------------	---------